

# 食品安全健康学科

## 1. 教育研究上の目的

本学科は、食の安全と健康機能を統合した学問領域を科学するため、幅広い基礎科目を基盤とし、多様な専門コア科目による教育を展開することにより、食の安全・健康上の問題解決力を備えた食品技術者・研究者・教育者・行政官となり得る人材育成を行う。

## 2. 教育目標

食品安全健康学科は、その人材養成目的を踏まえ、次のような者の養成を教育目標とする。

- (1) 食の安全を、最新の技術を取り入れたリスク分析手法により解析し、客観的に評価できる能力を有する者
- (2) 食の健康機能を、食品の生理活性成分と生体分子との関わりを通して解明することにより、生体影響を科学する能力を有する者
- (3) 食の安全と健康機能において発生した問題点に対し、科学的視点からの評価、情報発信により問題を解決する能力を有する者

## 3. ディプロマ・ポリシー

食品安全健康学科は、食の安全と健康機能の専門領域における確かな知識と技術、研究能力を修得し、食の安全と健康機能上の問題解決力を身につけ、以下の要件を満たし、かつ、所定の単位を修得した学生に対し、学位を授与します。

- (1) 食の安全と健康機能の理解の深化に必要となる論理的思考を展開する上での基礎科学の知識と、食品安全解析学、食品安全評価学、食品利用安全学、分子機能学、生理機能学、生体環境解析学の各領域における専門知識や研究を遂行するための技術を修得している。
- (2) 卒業論文の作成を通して、実験的検証をもとに得られた科学的知見から、論理的に思考することで客観的に事象を捉え、第三者に対しても的確に説明する能力を修得している。さらに、社会で必要とされる忍耐強い問題解決力、企画・提案力、プレゼンテーション能力を身につけ、広範な分野において活躍できる能力を修得している。
- (3) 研究室における諸活動および内外での体験的・実践的諸活動などに基づき、忍耐強い観察力により解決すべき問題点を明らかにし、周りの人々との協調性と自らの積極性、さらには幅広い専門知識から来る高い論理性を持って、その解決を図る能力を修得している。
- (4) 「生命」、「食料」、「健康」などに関わる専門性を活かし、学修の成果を実社会に還元し活躍しうる能力を身につけている。

## 4. カリキュラム・ポリシー

食品安全健康学科のディプロマ・ポリシーに掲げた能力を身につけるため、以下の専門科目を配当し、これに従い教育を行います。

- (1) 基礎的・基盤的知識の修得と食品に係る実践的な専門科目を体系的に学ぶため、「総合教育科目」、「外国語科目」、「専門教育科目」の3つの科目区分により授業科目を配当する。
- (2) 総合教育科目には、「導入科目」、「就職準備科目」などの、大学での学習方法等を修得する科目や、専門教育の動機づけとなる授業科目を配当する。
- (3) 豊かな語学力を身につけ、視野を広く、グローバルな観点から専門領域を理解していくため、「外国語科目」などを配当する。
- (4) 「専門教育科目」には、食の安全と健康機能の研究に必要となるしっかりとした学問的基盤のうえで論理的思考能力を修得させるため、化学、生物学などを基礎とした科目を配当する。
- (5) 食品素材を探求する農学を活かし、食品学を基盤とした食に対する深い理解力・洞察力を養うための授業科目「食品化学」、「食品物性学」、「食品加工保蔵学」、「食品機能学」および実学主義に基づいた多くの実験・実習・演習科目「食品化学実験」、「食材利用学実習」などを配当する。
- (6) 食の安全と健康機能を理解するため、「リスクマネジメント論」、「ケミカルバイオロジー、病理学」、「食品物性学」、「食品機能学」、「食品生理活性学」、「生理活性物質学」といった生体環境を考慮した健康科学に、安全学を融合させた新たな学問領域を構築していくための科目を配当する。
- (7) 先端的課題を題材とすることで、これに対する問題解決力を養い、論理的な思考をもとに表現し、社会に対する情報発進力を育成するための「インターナショナルフードアセスメント」、「バイオインフォマティクス演習」といった科目を配当する。
- (8) 課題解決型学習プログラムとして、「リスクマネジメント論」、「バイオインフォマティクス演習」を配当する。
- (9) 「総合化科目」には、4年間の学修の集大成となる「卒業論文」を必修科目として配当する。

## 5. アドミッション・ポリシー

食品安全健康学科は、生命に直結する「食の安全・安心」と「食の機能と健康」に興味を持ち、これを論理的に科学することで目の前のあらゆる困難な課題を解決する意欲を有し、将来、食品関連の技術者・教育者・行政官として指導的立場に立って活躍することを目指す、次のような学生を求めています。

- (1) 高等学校において化学および生物学の授業を履修し、内容について十分に理解している。また、語学においては、日本語・英語の双方について、文章の読解力、論理的な記述力を

身につけている。

- (2) 主観的思考に捕らわれず、客観的事実を受け入れることにより事象における結果を判断できる。
- (3) 「食の安全・安心」と「食の機能と健康」に普段から関心を持ち、未解決の課題に対し、自らが参加して解決したいという強い意欲を有する。
- (4) 実験研究に興味があり、自らが中心となって、多様な人々と協働してその研究を実施する能力を有し、結果を社会に向けて発信できる。